

五四風潮

——その實地に於ける見聞と若干の検討——

熊野 正平

五四風潮ウイキフオンチヤウというのは、元來は一九一九年（民國八年＝大正八年）第一次歐洲大戰の終熄に際し、パリの媾和會議に於て、山東省の獨逸權益を如何に處理するかの問題に就いて、中國側の主張が容れられなかつたことを直接の動機として、同年五月四日から、北京で學生達によつて惹き起され、曹汝霖（交通總長……總長は日本の大臣）を初め、章宗祥（駐日公使）、陸宗輿（幣制局總裁）等親日派と目された大官連が迫害を蒙つた騷擾事件である——風潮フオンチヤウとはもともと騷擾騷動の意味である——が、これが忽ちにして全國に波及し、一九一五年の、例の廿一箇條問題などから醗酵してきた對日感情の悪化とからみ合つて猛烈な排日運動となつた。この民八の五四排日風潮は、後々迄尾をひいて、日本にとつては洵に面倒なことになるのであるが、恰もこの頃を境として、中國の社會、思潮全般に亘つて、ひとつの新しい氣運が奔騰しはじめ、ついに之が新文化運動——新文化運動の萌芽はもつと以前に溯るのであるが——へと

つらなり、發展していつた。此意味に於て、五四風潮なるものは、現代中國史にとつて洵に重大な歴史的意義をもつと言つてよ。

ところで、普通五四運動とか五四時代とか言へば、かの國に於ては、この民國八年の五四風潮とその延長から新文化運動、及びその時代の意味に用いられている。そこで本題の五四風潮というのも大體この中國に於ける用法にしたがつて、五四の排日騷擾事件をさすこととする。

二

一九一八年（民國七年、大正七年）十一月、第一次歐洲大戰の休戰條約が成立すると、ついで翌一九一九年の一月から五月にかけて、豫備媾和會議がフランスの巴里に於て開かれる。當時中國からは陸徵祥、顧維鈞、施肇基等の人が全權として派遣されたが、此會議に對處する中國側の努力目標は、その頃盛んに朝野の人達によつて論議せられていたところを綜合すると、大體に於て

1 膠州灣租借地を含めて、山東省に於けるドイツの權益を日本に與えないこと。

2 一九一五年（大正四年）五月に締結された中日條約（註1）を無効とすること。

3 中國に於ける獨、塊の政治的經濟的權益を此機會に一掃すること。

4 諸外國の在支特殊權益を廢止することを究極の目標として、一般的協議を進めること。

と云うようなところに在つたと思はれるが、此目的を達成するために、中國全權團（註2）は随分秘策を練つて會議に臨んだ

ものである。

そこで、會議に於て顧維鈞全權は、「獨シ條約というものは、既に中國の參戰によつて無効となつてをる。且つまた今回の巴里媾和會議の一般原則の趣旨から言つても、山東の獨逸權益は中國へ直接還附されるのが至當である。」と主張した。

之に對して日本の全權側に於ては、牧野男が一九一五年の中日條約を引用説明し、尙一九一八年（大正七年）後藤新平、章宗祥間にとりかわされた山東諸問題處理に關する交換公文を擧げ、中國側が所謂廿一ヶ條條約を追認し、且つ「欣然同意」するとまで言つてゐることを指摘して中國の言い分を論駁したのであつたが、中國側は更に之に對して、一九一五年の中日條約はだいたい脅迫によつて成立したものである、しかのみならず又その後に於て重大なる事情の變更があつたから無効であると抗辯し、依然該條約を否認しようと努めた。

ところで、當時此問題に就いて我國で行はれた論議を回顧してみると、「なる程戰前の獨シ條約は、それは一般的に言つて中國の參戰によつて效力を失うかも知れない。併し、それだからとて其ために友好關係に在る日シ兩國間の條約が無効となる謂れはない。また今更脅迫云々と言うが如きは何と云う言いがかりであるか。大體この一九一五年の日シ條約なるものは、何故締結されなければならなかつたのか、中國側としてもよく反省してみる必要がある。抑、明治三十七・八年の日露戰爭は日本が東亞保全のために露西亞の滿州侵略を挫いたものである。本來ならば自國領土保全のために中國こそ起つて之を禦ぐべきであるのを、中國は其責任をとらうとせず、延いては日本の存立をも危殆に頻せしめ、恬として何等爲すところが無かつた。ために、日本は已むを得ずして蹶起したのである。而も戰後日本

の旅大關東州廿五ヶ年租借は只露シ北京條約を踏襲したまで、それ以上のことを中國に向つて敢えて要求したのではなかつた。これは蓋し中國がやがて自國領土保全の責任を切實に自覺し、日本を再び危殆に陥れるような過誤を犯すことがなくなり、此期間中に日本は之を圓滿に中國に返還し得る日の到來すべきを信じたためにほかならぬ。然るに其後の中國の爲すところはどうか。盡くこの日本の期待を裏切るものではなかつたか。外蒙や西藏はもはや事實上殆んど露西亞と英吉利のものと言つてよい状態の下にある。海州から蘭州に至る隴海鐵道、大同から成都に至る同成鐵道はロシア、フランス、ベルギーからの借款、欽州（廣東省）重慶間の欽渝鐵道、浦口信陽間の浦信鐵道は英國からの借款でという風に、次々に諸外國との間に借款契約を結んで、その都度莫大な權益を此等諸外國の手に委ねていつて居る。すなはち相變らず西洋諸國勢力の自國侵逼を招來するようなことをつゞけて一向改めようとはしない。あまつさへ歐米の國際借款國との借款契約によつて、日本の權益を壓迫妨礙しようとした。従つてあの場合日本が廿ヶ條の要求を中國に向つて提出したのは、日本としては、そうした情勢下に於て自國の、而して又東亞の保全を自己の責任に於て背負つて立たなければならぬ立場におかれたものとして、自國の中國に於ける地歩を相當に固めて置かなくてはならない焦慮と必要から、事情已むを得ないものがあつたのである。一概に歐米各國が自己の存亡を賭しての戰爭のために、中國を顧みる道がない機會に乘じ、只沒義道に力を憑んで脅迫によつて中國を屈服させたというのは當らない。哀的美頓書（*フレイムトン*、最後通牒）を突きつけたのがいけないと言うが、それは輿論の反對を封ずるために袁世凱の方から求められたまゝに隨つたに過ぎない。又中國はその一九一五年の中日條約そのものに基く鐵道借款の内金を既に日本から受けとつて使つてゐるではないか。金だけは取つて使つてをきながら約束の方は御免

蒙ると言うテはなからう……と言うのが是亦日本朝野の意見であつたから、日本の全權も譲る譯にはいかない。そこで會議の音頭をとつたアメリカ大統領ウィルソンも中國に對して非常に同情的であつたが、さて之を如何ともしようが無かつた。そこでやはり米國全權であつた國務長官ランシングをして、日佛米英伊の五大國間の相談に委ねることを提議させたり、又英國側も全權ロイドジョーヂが、聯盟の委任統治にすることを提議したりしたものであつたが、日本はついに之を承諾しなかつた。時しもたまたまヒューメ問題の紛糾から、伊太利が一時媾和會議を脱退すると云う騒ぎが起り、會議の前途が危ぶまれた關係もあり、結局英米佛の最高會議で、青島は日本の主張どおり一應日本へ渡す、然る上で將來更に改めて日本から中國へ返還するという事に話が纏められた。

斯うなると、中國側の主張はまづ一應形の上では敗れたと云うことになつたため、中國は會議を脱退して條約に調印しないことになつた。そこでこの媾和會議に中國が出ておつた山東問題以外の、勢力範圍の廢止、在華外國駐屯軍の撤退、外國郵便局撤去、領事裁判權廢止、租借地返還、租界回收、關稅自主權回復等の要求も、自然すべて何等まとまつた結果が得られずに了つたのである。

然るところ、これよりさき巴里會議の狀況が逐一中國々内に傳つて來ると、各地の對日感情は急激に悪化していつたが、殊に北京では學生の有志達が集まつて、よりより協議をかさね、對日一大示威運動の決行を計畫しつゝあつたのであるが、會々五月一日の大陸報に巴里會議失敗の、中國代表からの消息が掲載せられ、越えて三日また二三の新聞に若干の在京外國教員から傳えられた情報として、^(註4)「中國の外交は完全に失敗した。其失敗の原因は曹汝霖・章宗祥・陸宗輿等が對日交換條文の上に「欣然同意」するとの四字を大書した爲である。此文句があつたために中國代表

はどうにも動きがとれず、又アメリカとしても、如何に中國を援助したくとも援助のしようがなかつた云々^(註5)との記事が載せられる。そこへまた、ちょうど其頃、婦和會議の應援に巴里まで出かけてをった梁啓超の政府に宛てた警告の電報が大見出しで各新聞に出されるやうで、人心を刺戟すること甚しかつた。三日四日には各政治團體も連りに緊急會議を開いて對策を協議する。北京總商會からは「請共爭山東問題」の通電が全國の各商會に向けて發せられる。上海總商會でも六日に總會を開いて態度決定の相談が行はれるし、國民外國協會でも代表を出して徐世昌大總統に面會を求め、婦和會議の全權に對して、即刻調印拒絶を電命するよう要求するといふ風で、文字通り物情騷然たるありさまとなつた。

恰も前述のように、四月末頃から對日示威運動に就いて、いろいろ計畫しつゝあつた北京各學校の學生達も、愈々起つて全國大小各新聞及其他各種團體に向けて

『青島返還の交渉は將に失敗におわろうとしている。五月七日は目睫に迫つた。全國民は須く一齊に奮起すべきの秋である。此日を卜して國恥紀念大會を執行し一致外敵に當らんことを乞う。』

北京専門以上學校全學生二萬五千人叩。』

との檄文を發し、五月三日(夜)には各學校代表が北京大學に於て臨時緊急會議を開き、初めの豫定五月七日——一九一五年日本が最後通牒を出した日——を繰り上げて四日に之を執行すべきことを決議した。

斯くて愈々當の四日ともなると、専門學校以上十四校五千有餘の學生が朝から天安門に參集し、手に手に「中國是中國人的中國」「廢除二十一條」「收回山東權利」「誓死爭回青島」「拒絶巴黎和會簽字(署名)」「不做亡國奴」「打倒賣

國賊曹某陸某章某「反對強權」「打倒日本帝國主義」「抵制日貨等」の文字を記した——中には血書のものもあつたとも記録されている、(華崗、五四運動史一〇九頁)——大旗小旗を持ち、大學して先づ總統府へと請願に出かけ、賣國奴曹汝霖・章宗祥・陸徵輿の懲辯を要求したが要領が得られない。そこでこんどは日本公使館におもむいて示威しようというので、東交民巷へ入ろうとしたが外國守備隊のために阻止せられて目的を遂げることが出来ない(註6)。激昂した學生は方向を轉じて東長安街を東進し、北轉して御河橋を過ぎ、沿路口々に「打倒賣國賊曹汝霖、章宗祥、陸徵輿、徐世昌、段祺瑞」等々の口號(スローガ)を絶叫しつゝ趙家樓なる曹汝霖邸にむかい、やがて曹汝霖邸前に到るや、銘々聲を洶らせて罵詈雑言を浴せ、手にせる旗を邸内に向つて投げこみなどするうち、幾人かの熱狂した學生が土塀を攀じたかどつかして邸内に闖入し、中から門を押し開いた。群衆心理に驅られ、モップ化した學生達は、そこで一時にとつと邸内に亂入し、大荒れに荒れて家具調度の類は手當り次第亂離骨灰にうち毀し、たまたま居合せて避難しおくれた駐日公使章宗祥を捉えて散々に殴打し、ついに邸内に火を放つた。

兎角するうちに急を聞いて驅けつけた軍警が邸外を取り圍んで消火と鎮壓にかゝつた。しかし彼等學生達の大多數は、此時にはすでに逸早く逃げのび、逃げおくれた三十二名の學生(註8)が捕まつて警察廳へひかれたのであるが、此騒ぎで學生側にも若干の死傷者が出た(註9)。斯うして大體鎮壓が終つたのは略々夕方の六時頃であつたように憶う。

借、暫くすると七時頃にはもう此等捕えられた學生達は殺人放火罪として軍法會議で處斷せられるという取沙汰がしきりに巷間に傳えられた。そこで北京大學校長蔡元培は急遽北京の大學高專十四校の校長を集めて鳩首協議の末、被捕學生全部の保釋釋放を要求することとなり、警察廳と交渉を開始したが、其時の校長會議の言い分は、「此一舉は

團體共同の運動であり、會、逮捕された小數者のみに責任を歸することは出来ない」と言うに至つた。

明けて翌五日となると大小各新聞が一齊に筆を揃えて學生等の行動を愛國運動であると稱揚し、大いに彼等のために聲援を送つたので、學生達の意氣は居然として昂り、各校代表學生が北京大學に集まつて同盟休校を決議し、一致團結して被捕學生の釋放と曹汝霖等の罷免を政府に要求することとなり、尙此目的及び一般に對日救國運動を貫徹するため、中等學校以上の學生全部を包含する北京學生聯合會というのが、北京大學及北京高等師範學校を中心として茲に組織せられるに至つた。

この北京學生聯合會こそ、實に爾後の排日排貨運動に絶大の力を揮つた近年の中國學生聯合會なるもの、はじま瓶りであるが、六日には早くも聯合會組織大綱が出来、役員として評議部と幹事部が設けられた。評議部は一切の議決機關、幹事部はその實行機關である。斯うして此組織の活用により、愈々所期の目的達成のための猛運動に乗り出す熊勢が整えられていつた。

この間、各學校の當局は連日連夜政府警察廳側と學生側との間に立つて東奔西走事件の前後措置に努力したが、やうやく汪大燮、王寵惠、林長民等名士の出馬斡旋を得て、まづどうか被捕學生の保釋出獄とまでは漕ぎつけたものの、政府側では依然あらためて騷擾學生の處罰は必ず斷行する意嚮であるとか、或いは又大學は近く解散せられる筈であるとか、其他種々の謠言が亂れ飛び、教育總長（文部大臣）傳增湘はじめ各學校校長が一同引責辭職を呈請するなど、事態の紛糾はなかなか収まりそうもなかつた。そこへ九日の大總統令で、やはり「騷擾學生は法庭に送交して法に依つて處分する」旨發表があつたので、學生側で復又騒ぎ出し、各學校校長會議の議長であつた蔡元培もよくよ

く處置に窮したのか、九日夜ついに、

「自分は疲れた、暫時休養したい。北京大學長の職は既に正式に辭任した。今後學校關係の集會とは一切干與しない」
(註10)

との一片の啓事(聲明)を残したまま天津へ奔つてしまつたものである。

ところが蔡元培は新文化提唱の首領として、從來舊派の學者政治家から睨まれていた關係もあり、この度の學校騒動も實は彼が元兇であると見られ、政府その他から相當壓迫があつたとの風評もあつたので、こゝに學生側は又一段と緊張する。恰も好し、ちようど斯うした際に總檢察廳から北京地方檢察廳へいよいよ曩きの保釋學生等を再び引き出して審判に附するやうにとの命令が下つたのである。

こゝに於て學生側は急遽北京大學に參集して緊急會議を開き、當局の處置を不當として、法庭が若し被捕學生の罪をどうしても糾弾すると云い張るなら、事實曹汝霖邸焼打ちは、決して只會、其時逮捕せられた彼等三十二名の學生だけの責任ではないのであるから、運動に参加した全學生が打ち揃つて自首して出ようと決議して大いに氣勢を示すし、又、全北京の中學がこれに加入を申込む。それにつれて、中學以上の教職員までもすべて一致して連袂辭職を合せ、茲に北京の教育界は擧げて大混亂に陥つてしまつた。

それからというものは、北京の中等學校以上の學生は、全部テンで學業などはよそにして、夫々講演團なるものを組織して毎日街頭に進出し、一般民衆に向つて對日外交問題の大道演説を試み、日本帝國主義者が如何に蠻横兇暴にしてこれまで我中國及び中國人を欺、侮、壓、迫して來たか、我が滿洲朝鮮を奪ひ、臺灣澎湖島を略取し、琉球をとり、今

また神州の聖地山東にその毒手を揮はんとしつゝある。而も之に對して我軍閥政府は詭詐無殘の東洋（日本）鬼子と勾結串通して國を賣り、民衆を壓迫し只管私利私欲を擅まにしつゝある。苟くも我々にして甘んじて倭奴の下に亡國奴たることを欲しないならば、四萬萬の同胞一致團結、死を誓つて以て之に當り狂瀾を既倒にかえさねばならぬ。その第一着手は劣貨（日本品を云う）を抵制してまづ經濟的に日本の死命を制するに在る……と言つた類のことを慷慨悲憤聲淚並び下る口吻で以て大衆に訴えるのである。そうしては市内の商店から日本品を隨意に持ち出して焼き拂うという風にまで事態は昂じて行つたものである。中には遠く湖南湖北其他の方面までも出掛ける者も尠くなかつた。

更に教員側に於ても九名の代表を選んで大總統に面會を求め、一、教育界の事に對してはより一層適切な態度を採られたい、二、善後措置に關する事項、三、蔡元培の復職に就いて政府側の誠意を要求する、と云う三ヶ條の要求を提出した。こゝに於て教育總長傳增湘も亦蔡元培の例に倣つて、十三日ついに引退を表明し、西山に引き籠つてしまつたが、以て其當時の政局の裏面に如何に複雑怪奇を極めたものがあつたかど想見されよう。

それは兎に角、政府の立場としては、學生の言うが儘に其要求を容れることは勿論出來ない。のみならず一方では、教育界がこゝ迄紊亂するとは一體何たる醜態であるか、これは是非とも此際根本的に一大刷新の大鉈をふるう必要があるろうと主張する强硬意見が擡頭し、竟に當時國粹强硬派を以て鳴る田應璜と馬其昶とが、それぞれ教育總長及び北京大學校長に任命を見た。然るにこれまで北京大學を中心に牙城を築いていた新派の學者教員は勿論、學生達としても、此際此二人に教育行政をやらせ、殊にこんどの事件の後始末をつけさせることになれば、今後自分達が如何なる

運命の下に置かれるかは問はずして明かである。斯うした場合の彼の國の人々の神経の鋭敏なことは實際我々の想像以上であるが、また其は必しも謂れない杞憂とは言はれない國情でもある。そこで情勢は再び急轉直下十九日に到つて教員も學生もすべてが大団圓結して總罷課に入ることゝなつた。

總罷課に入つてからの北京學生聯合會の活動はいよいよ以て目醒ましく、各地學生會への打電飛檄、代表派遣から其他普く社會各界の諒解と同情を求めることにあらゆる努力が拂はれた。斯くてこの所謂學潮——學校騷動——は恰も燎原の火の如く全國各地に擴がつていつたのであるが、他地方のことに就いては暫く後に譲るとして、北京の學生達の氣勢は愈々出でて愈々あがり、街頭演説から一層進んで「國貨販賣」という新しい愛國運動様式へ發展してゆくのである。「國貨販賣」とは學生達が各商店商社を歴訪し勸告して日本品の取扱いをやめさせ、之に代うるに中國の國貨即ち國産品を以てせしめるという運動である。歴訪勸告と言つても、文字通りの歴訪説得というような生やさしいものではない。歴訪と云つても實質に於てそれは臨檢であり、勸告と云つても、それは次第によつては没收燒却或いは罰金——もつと後に至つて排日排貨の極盛時代には種々の體刑、監禁、晒しものにする等にまで發展する——を伴うもので、それを官憲ならぬ學生が執行するのである。

こんな具合で政府側では日本に對する手前からも、このなりゆきは黙視できない。六月一日に至つて學生の行動を「糾衆滋事、擾亂治安」ものとして三日を限り、學生の國貨販賣、街頭排日演説の嚴禁を發令したが、學生達はそんな命令には些しも頓着しない。相變らず早朝各學校で勢揃いをした上で、各班に編成を分け、「講演團」を組織して堂々と彼等の所謂愛國運動なるものに押し出すのであつて、當時北京城内の街頭に立つて演説した「講演員」の數

は實に二千人以上に上つたものである。勿論巡警との小ぜり合い乃至大ぜり合いは此處彼處で演ぜられ、逮捕された講演員の數が三日の晩には實に八百餘名に達する始末、抑留場所に困つて已むなく之を北京大學の第二院第三院即ち理科及び法科教室が抑留所に充當せられるという状態であつた。

然るところ、各新聞其他大小言論機關は何れも、どこまでも彼等學生を愛國の志士としてとり扱い、喧々囂々檢察當局の措置を攻撃するし、男學生は勿論女學生等も街頭に立つて道ゆく人から義捐金を募り、これを抑留所へ届ける外、社會各界からの差入れの金品、食料品其他が北大第二第三院には山と積まれ、斯くて被捕學生の人氣は彌が上にもあがつた。加之、上海天津漢口を初め全國各地の學生聯合會や商會工會などが續々同盟罷課罷市を決定して檢察當局へ抗議電報を寄せる、孫文・康有爲・梁啓超・孫寶琦・張謇のような著名人士の學生に同情して政府を問責する通電が發せられると言つた状態であつたから、逮捕された學生達の意氣も衝天の慨を示し、抑留所内に至つて評議部幹事部の下に尙交際股（係）、庶務股、會計股、糾察股（裏切り軟化を防ぐため）、衛生股の各部署を設けて井然たる組織を作り、飯前茶後には、あまつさえ看視の巡警に向つてすら排日排貨、賣國賊政府攻撃の愛國演説の熱辯をふるひ、ために學生側の報告するところによると巡警多く流涕するものがあつたと註せられている。街頭演説に出る學生數は日を累ねるに随つて増すとも減ることはない。中には逮捕を見越して夜具を背負つて講演に出かけるものもあつた。

この様な情勢の推移に、今は檢察當局もすつかり持て餘し氣味で、五日已むなく有耶無耶の裡に抑留所の圍みを解かせ、被捕學生の自由退散にまかせたのであるが、斯うなると學生側が逆に非常に強硬な態度をとり出して、「何故に斯くも恣に我々の人權を蹂躪したのか、其に對する明確合理的な説明を聞くまでは、我々は斷じて此處を退散しな

い」と、政府に向つて詰問する。教育部（文部省）は之がため特に「慰撫委員」を出して陳辨説得に努めさせたが、反對に其委員等が説教されて追い歸えされて来る。結局政府側もいよいよ處置に窮して正式に遺憾の意を表明して、やつと事件も落着、茲に六月七日全被捕學生は凱歌を擧げて銘々自宅へ引取つたのであつた。

このような北京に於ける學生運動の時々の様子が具さに各地に伝えられると、南京、杭州、武漢、天津、九江、山東、安徽、厦門、廣東等全國の此處彼處に於て、大なり小なり大體北京に於けると同様の騷擾事件が相ついで起り、南京では二十八人の學生が巡警のために刺傷を受け、武漢でも多數の學生が捕えられ一名が殺され、殊に福建では死者が多かつた。

後に五四風潮の中心地となつた上海では、五月三十日西門體育場に於て、曩に述べた北京での曹汝霖邸燒打の際負傷して終に死に至つた北京大學學生郭欣光——當時中國學生は皆郭欣光烈士と喚んだ——の追悼大會を舉行して氣勢をあげ、六月一日には上海學生聯合會の提唱によつて參集した天津、北京、其他の各地及び留日學生聯合會の代表が協議の結果、全國學生聯合會を組織することとなり、十六日竟にこれが全國學生總會としての結成を見、（註11）即時

一 青島を一應日本の手に渡すことを承認せず。

二 二十一ヶ條條約の取消。

三 賣國賊（曹汝霖・陸宗輿・章宗祥等を指す、彼等は六月九日既に辭職していたが、尙その）處罰。

との要求を決議し、總會の事務所を上海に設けて、一切の學生愛國運動を總理することとなつた。こゝに此運動の中心は北京より上海に移り、全國的な統一をもつものとなり、排日排貨の運動も爾來益々深刻重大化して來たのである。

大體上海の商界は學生の此所謂愛國運動なるものに對しては、最初は相當冷靜且つ批判的であつた。併し上海學生聯合會の活動が、北京學生運動の經過が詳細に傳へられるに隨つて活潑化し、組織立つて來て、各界にはたらきかけた結果、六月三日の上海各界民衆大會について五日にはついに全市の罷市が宣言され、勞働者側も先づ第一に上海鋼鐵機器工匠のそれを皮切りに、印刷工、電車、紡織、鐵道、海員及江南船塢等が相繼いでストライキに入つたが、就中滬寧鐵路の勞働者の罷工の影響は大きかつた。斯うして學生による五四風潮は、竟に學・商・工聯合の一大運動に發展して行つたのである。

新聞は連日初號見出しつきで大々的に之を取り扱うし、雜誌小報の類亦同様で、自然一般民衆の對日感情も逐日惡化し、在留邦人への危害も、直接間接いろいろの形で發生するようになり、中には到底こゝに筆にするに忍びぬ底のことも起つたものである。

斯る間に六月廿五日になると、各新聞に、結局中國全權もヴェルサイユ條約には調印することになりそうだ、と云う外電が載せられた。是に於て又全國騒然、殊に北京では、京津一帶一萬餘の學生が懷仁堂の總統府に迫つて、徐世昌大總統に即時條約不調印の命令を中國全權團に出せと要求し、各界代表と稱するもの數百人で、「新華門聚哭」とて、今尙時に人の話柄に上る、總統府に間近い新華門外に聚團し、聲を揃えて哭くと云う怪運動まで展開された。

以上のような國內の狀況が巴里に在る中國留學生に傳はると、留學生達も之に同調して全權團にはたらきかけ、調印當日は中國全權の宿舎におしかけて全權の條約調印に出掛けるのを阻止し、「若し卿等が敢えて調印に出むくと云うなら、我々も亦國內の學生達が曹汝霖等に對して爲したと同様のことを卿等に對してしなければならぬが……」

と威嚇したとやら、それかあらぬか廿八日、終に中國全權のヴェルサイユ條約不調印の電報が國內にもたらされた。これが當時筆者が上海・北京・福建・廣東・武漢等の地を往來して見聞した五四風潮の發端と經過の概畧である。當時蒐集した資料・寫眞等は一應全部上海で兵火に焼かれ、今手許にある僅かな材料をたねに、舊い記憶を辿つて綴つただけに、細かいところで若干の不安はあるが、五四風潮の大體の空氣の一斑は、これで略々傳へ得たかと思う。

註1 一九一五年一月十八日日本は二十一ヶ條の要求を中國政府に提出。此要求は五項に分類され、(一)山東に關する四ヶ條、(二)南滿洲及び東部內蒙古に關する七ヶ條、(三)漢冶萍公司關係の二ヶ條、(四)福建省不割讓に關する一ヶ條、(五)日本人顧問招聘に關する七ヶ條から成る。此要求は中國側の容易に容るゝところとならず、修正がなされ、五月七日日本は最後通牒を送り、同九日中國政府承認、二十五日第五號案を他日の商議に譲ることとして、遂に條約調印となつた。中國は此五月九日を以て國恥記念日とす。

註2 陸徵祥、顧維鈞、王正廷、施肇基、魏宸組の五名。

註3 これは殆んど問題にならない事實で、従前の中國文獻も皆アメリカ大統領の中國に對して同情的であつたことを誌しているが、最近の中共系のもは却つて反對のことを書くようになってゐる。

註4 陳瑞志、五四運動之史的評價、二三〇頁。

註5 同。

註6 學生團は英米佛公使館へ交渉したが、庚子條約の規定により彼等が交民巷へ入ることは許されなかつた。日本公使館は東交民巷。

註7 曹汝霖等はいち早く六國飯店へ避難した。陳瑞志、前掲書二二六頁。

註8 その内譯、北大一九、高師八、工專、滙文、留法豫備等合計五。

五四風潮

註9 死者は北大學生郭欣光、打撲傷をうけて幾日かの後死亡したのであるが、烈士郭欣光として其名が喧傳せられた。

註10 蔡元培の此啓事は當時人口に膾炙したもので、

「吾儕矣、殺君馬者道旁兒、民（蔡氏號子民）亦勞止、汽可小休、吾願小休矣！ 北京大學校長之職已正式辭去、其他向有關係之各學校各集會、自四月九日起一切脫離關係、特此聲明、惟知吾者諒之」

「殺君馬者云々」は當局者を諷刺したものであるとは彼の後日の説明。

註11 成立までの経過については陳瑞志の前掲書二三八―九頁に詳し。

三

情、このような五四風潮なるものが、怎うして起つたものか、此に就いてはいろいろのことが考えられる。

まづ直接の動機は巴里媾和會議に於ける中國側の外交の失敗（註1）に在つたことは既に述べた通りであるが、實際かの巴里會議こそは、中國にとつて從來の卑しめられた國際的地位から脱するための絶好の機會であり、而して山東問題こそ其好運を捉え得るか否かの重大な試練として與えられたものと當時の中國人には考えられたのである。これは中國に在住して、當時の中國人の此問題に就いて論ずる口吻や意氣ごみからも十分窺はれたことである。さればこそ、その頃の中國は南北の抗争や内亂で、國內寧日も無かつた際にはあつたが、それにも拘らず、いざ巴里會議の全權代表を選ぶと云う段になると、其選ばれた顔振れをみても判るように、南北合作即ち舉國一致でその人選に當つてゐるのである。この一事を以てしても、如何に彼等が此會議に寄せた期待が大きかつたかが想像せられるのであつて、その期待が大きいものであつただけに、また一方其結果が期待から外れた場合の失望も、大きく且つ深刻であつたのは

當然である。列強の中では最も抵抗の弱い箇處と睨んで日本を目標に選び、先づ此一角から突き崩してかゝり、おいおいに自國の國際的地位を改善してゆく一轉機たらしめようと思氣ごんだ外交が、事志と喰いちがつたのである。折角民主共和國となり、此から以後は國勢蒸蒸日上として日に上るであろうことと希つたものを、また軍閥の如きものが出現して内亂又内亂、政治はトツと改善せられず、社會の紊亂民生の困苦は前清時代に輪をかけたありさまで、むしろより甚しいものがある。青年知識層が一種言わうよう無き焦燥感に陥つたのはまた無理からぬことである。この焦燥とヴェルサイユへかけた期待が見事に裏切られた憤懣、まざまざと暴露せられた自國の國際的地位の現實、延いては前途への不安等々のことが重なり重なつて、茲にこれが一時に爆發したのが五四暴動事件であり、それ以後の五四風潮である。

ところで、此時の學生團の、政府にも警察にも殆んど只手を束ねて彼等の爲すところを傍觀する外無からしめたところの力——それも暴動時等の一時的と云うのではなくて、長期に亘つた對社會的威力——というものは、怎うして顯現し來つたものであり、又それには如何なる裏付けがあつたものであろうか。

五四風潮が北京から全國各地へと、恰も燎原の火の如く傳播して行つた時、所詮これも一時の熱狂的興奮——當時よく謂われた「五分鐘の熱度」で、いづれ遠からず其熱が冷めると共に收まるであらうとは、中外一般の人達の豫想であつた。然るに其豫想を裏切つて、之が何ヶ月も續き、而も翌年翌々年と、ずつと後年迄も尾をひいて、山東問題が一九二一年の華盛頓會議に於て、日本の讓歩によつて解決するまで、毎年五月四日前後を中心に根氣よく、年中行事の如く繰返され、而も益々激化する周期的持續運動のようになり、學生達の威力も段々と強化されて、國貨販賣——

―抵制日貨の運動も、各商店社の帳簿、在庫品の點檢から、此は前にも一寸述べて置いたが日貨の沒收、燒却、更に進んで違反者への制裁―罰金、時には體刑、例へば木籠[↑](檻)に入れて大衆の前に晒すと言つた類のことを敢えてするまでに發展していつている。

ところが、社會一般の側に於て、學生運動の行き過ぎや越權を憤慨し怨嗟する者も勿論ずい分あつたにも拘らず、それが社會の表面に否定的な力として結集されるに至らず、學生團は依然「堅持到底」で、相も變らず宣傳と運動を續け、兩國の官憲對官憲の公邊筋の抗議も殆んど實際的效果をもたらさなかつた。社會一般の人氣、之を今假りにこころでも輿論と呼ぶことが許されば、其力は洵に偉大なものがあつたと謂はなければならぬ。

倭奴(日本)は帝國主義者であり、侵略者であり、強盜である。故無くして我臺灣を奪い琉球を取り、我が朝鮮を併せ滿洲を掠めて尙憚らず、今また我が山東にその魔手を伸して來て居る。彼等の稱うる中日親善は假面に過ぎない。日本と中國は正に兩立し難き冤家(かたき同志)である。日貨を扱う者は敵の走狗、日貨を買う者は漢奸である。

と云うようなことを毎々繰返して目に耳に宣傳されると、衆口金を熔かすの道理で、ついに一般民衆の心理にも漸次深く之が浸透し、竟に「人云我亦云」ということになる。そこではもう、その正否の問題ではない、大勢である。而して一度び斯うした大勢が醸成せられると、之に逆うことは容易でないし、よく此動嚮に乗る者は權威を有つ。五四の際の學生團のもつた權威は實に斯様にして形成されたかと思ふ。

併し斯ういう大勢が醗釀せられ、又そうした權威が形成されるには、只單に宣傳だけではそうはいかぬ。そこまで

ゆくには、それに適わしい環境或いは零團氣社會事情が無くてはならない。然らば五四の學生達をして、それ迄の權威を有たしめ、又社會がそれを容れた縁となり又裏付けとなつた事情とはどんなものであつたであろうか。管見によると、それには大體次のようなことが考えられると思う。

先づ第一に、當時の中國は南北對立し、北京政府は、段琪瑞一派の安徽派及新交通系が政權を掌握していたが、其反對派たる曹錕を首領とする直隸派は虎視眈々として之が顛覆の秘策をねりつゝあつた。ところが段琪瑞の對獨宣戰以來、日本の寺内内閣は所謂援段方針をとり、之をして中國統一を遂げしめようと、獨露の單獨媾和成立のため、中國の北邊が危急を告げるに至つたとの理由により、華北共同防備のための中日軍事秘密協定を結び、邊防軍組織に數多の日本軍人を教官として派遣し、軍事、政治、實業借款の名の下に、約一億二千餘萬圓の、西原借款として知られる巨額の借款を段に與えた。これは段政府にとつては、非常に好都合であつたが、之が南方派及び反對派壓迫の軍資金となるのは判りきつた話であるから、直隸軍閥及び進歩派政客は之を以て政府攻撃の手段としたので、全國は當然として段一派の賣國行爲を責めた。段琪瑞は一時之がために罷官したが、彼を擁する安福俱樂部は議會で絶對多數を占め、反對黨は表面的政争を以てしては如何ともすることが出来なかつた。そこで輿論の煽動を以て闘うという策に出たのであつて、直隸派政客が連りに其間に在つて暗躍し、陰に陽に學生運動を支援し、排日とそれによつて段派を窮地に陥れようと謀つたのである。當時直隸派の巨頭として其名一世に高かつた吳佩孚の如きも、彼自身が山東省の出身である關係もあつたであろうが、

「山東の聖地保護のためには、最後の一兵に至るまで戦うことを辭せぬ」

と云う通電を全國に向つて發している。

而して又その直隸派の背後には英米等の諸外國がいた。大戦中は已むなく、中國に於ける日本の跳梁を許さざるを得なかつた此等の國は、終戦と共に戦前の勢力回復のために、日本制肘を企圖したのに不思議はないが、これが方策の一環として彼等自體亦學生達の五四排日の運動を支援したのである。公使館員や領事館員などまでが直接間接之に干與して活躍した形跡があるとは、此は當時風評に聞いたことであるから眞偽の程は保證出来ないが、大會社例へば英米烟草のような公司からは相當多額の運動費が提供されていたようで、又其頃上海其他で出ていた外字新聞の記事なども、随分無遠慮に煽動的な書き振りをしたものである。尙此等の國が中國に於て尠からぬ學校を經營していたことは衆知のことであるが、北京・上海・濟南・保定・杭州・武昌・安慶・開封・廣東・香港等にあつたそれらの學校の學生が五四運動に如何に活躍したかを知る者には、亦その背後の力として其等の國の手の動いたことを信じない譯にはいかなない。

尙此に關聯して想い起すのは、外人宣教師の演じた役割である。英國や米國の宣教師が當時總數どれ程中國に入り込んでいたかは知らぬが、全國到る處、こんなところ迄と思つて程彼等の建てた教會があつたこと、及民國八・九年頃の盛んな時には、一船毎に十人二十人或いは三十人以上もの宣教師が渡來したもので、アメリカに就いて云つても毎年さうした傳導關係に、二千萬弗の金が使はれたと言ふことであつた。此等教會關係の手で經營されていた大學と高專が廿七校を數えたから、當時としては中國側の國立の大學高專の數より多かつた譯で、中小學に至つては夫々數百、數千に達していたであらう。^(註2)

筆者はその頃此種の或る學校を參觀したことがあつたが、まづ玄關わきの入口に日米兩國の國勢比較表が掲げられてあつた。國土の面積、主要物産の産額、工業力、交通等に關する數字が對照的に並べた線の長さで一見して判るよ
うに示されたものであつたが、此などは日本の國力がアメリカに比して如何に微小であるかを印象づけるには尠らず
効果があつたであらうことは想像に難くない。又斯うした學校で時々學生に見せる學校映畫には物語の合間合間に、
外國風景などが挿入されていて、それが紐育の雄大な摩天樓を映した直後には、日本の田舎町の場末の風景が出てき
て、そこには鼻垂らしの子守少女が赤ん坊を背負^{かか}っている畫面が映寫される。實に宣傳としても巧妙なもので、斯う
並べられては頼るなら何れの國に頼るがよいと考へるか、言はずして明かであらう。

此等はほんの一例であるが、凡そこの種の文化宣傳工作が幾多の方面に亘つて、而も其がバラバラにはなく、
すべて或る遠大な統一目的への効果を狙つて、細心に工夫されているのである。なる程やはりこれは日本などよりは
數段役者が上であると、實際感心させられたものである。北京の同仁醫院のようにアメリカの協和醫學校と對立して、
臨床的實力に於て、大いに日本醫學の爲めに氣を吐いていたなどは寧ろ特例で、總じて文化宣傳工作では着手も遅く
到底比較になるものでなく、完全に負けていた。何しろむこう様のそれは幅も廣く規模も雄大で、且つ又辛棒強く年
季が入っている。

ついで中國當時の知識層の國勢挽回自國改造に就いての考へはと云えば、もと中國今日の不振は、職として國內的
には軍閥の横行と、國際的には帝國主義者の政治的・經濟的侵略乃至壓迫に由るものである。而も帝國主義者と軍閥
とは、結托して互いに利用し合い、以て各々其野望を遂げようとしているものであり、尙一層剝實すれば帝國主義者

こそ元兇であり本であつて、軍閥は寧ろ走狗であり末である。とすれば中國の國勢挽回には列強帝國主義の打倒こそ拔本審源の途、而も外力の排除は一舉に之を期待することは不可能で、怎うしても之を逐次にやるのでなくてはならぬ。而も逐次に之を行ふとすれば、其の第一の攻撃目標には先づ日本をえらぶことは、時にとつて策の最も得たものであるとしなければならぬ。と云うのは、一、日本は隣接國であるだけに、刻下の利害最も對立し、領土の侵蝕を受ける害も殊に大きい。其毒手は既に滿洲より進んで山東に及んでをり、之を挫くことは焦眉の急であること、二、大戰の終結により、日本の獨擅場の時機は已に去り中國に對しても列強共同の牽制下に置かれるようになった爲め、これまでの如く思うが儘に力を憑んで一己の主張を強要することは出来ない。三、而も日本は戰時中列強が東方を顧みる違なきを倅に、獨り跳梁を擅まにして各國の東亞に於ける權益と市場を侵吞して來たため、今や國際間の憎れツ子となつてゐる。四、國力頓に強大を加えたとは云へ、もと是れ暮齋たる島國に過ぎず、國土は狭小、人口は過多、立國の基礎の商工に置かれる比重は大きい。而して其の對外貿易に於て中國の市場を失うことは正に致命的である。(註3)また國內資源の貧弱さは原料を中國に仰がなければ其工業も成り立たぬ。故に今英米諸列強をして之を牽制せしめつゝ、日貨を抵制し更に經濟斷交を以て之に當れば、必ずや日本も竟に屈服し、其野望を封ずることが出来るであらう……とは、大體當時の中國知識層に於てのブリヱーリング・アイディアであつたと見て間違ひはなからう。

それに今一つ重大なのは經濟發達上の事情である。中國貿易はずつと以前から輸入超過をつゞけて來てゐる。輸出は殆んど農産物や原料が主、輸入は製造品、洋貨で、年によつて異同はあるが、いつも數億乃至數千萬兩の入超となつて來てゐる。外國品の中國市場に於ける優勢ということは、國貨製造がそれだけ制肘されて伸びないでい

ることである。又所謂「利權外溢」で、南京條約以來の歴史的經緯いきまきのため、列國の手に渡さなければならなかつた各種權益の故に、國內の工・鑛業、それから鐵道、航業等、比々として何れも諸外國の操縦下に置かれ、銀行、さては最も後進國としての中國の手に適うと思はれる紡織業に至るまで皆外國のものが優勢である。現在の中國社會史家の口吻を藉れば、「國民經濟の咽喉」とは帝國主義の鐵腕によつて締めつけられていた」と言うのであるが、所謂「不平等條約」に制約せられ、關稅自主權をも喪へる帝國主義下の中國産業の發展が、非常に困難な狀況に置かれたものであつたことは蔽いがない。然るに一九一四年から一八年に亘る第一次歐洲大戰の勃發以來、列國は自國の攻防に忙しくて、もはや中國の市場とか、中國への勢力擴張などを顧みている暇はない。即ち諸外國の在中國政治的經濟的勢力の退潮時代である。斯くて此機會に中國の土着産業も或る程度の發展をとげることが出來た。

年次	輸 入	輸 出	入超(海關兩)
一九一三	四七三、〇九七、〇三一	三七〇、五二〇、四〇三	一〇二、五七六、六二七
一九一四	五七〇、三六二、五五七	四〇三、三〇五、五四六	一六六、八三七、〇一一
一九一五	五六九、二四一、三八二	三五六、二二六、六一九	二一二、〇一四、五五五
一九一六	四五四、四七五、七一九	四一八、八六一、一六四	三五、六一四、五五五
一九一七	五五六、四〇六、九九五	四八一、七九七、三六六	三四、六〇九、六二九
一九一八	五四九、五一八、七七四	四六二、九三一、六三〇	八六、五八七、一四四
一九一九	五五四、八九三、〇八二	四八五、八八三、〇三一	六九、〇一〇、〇五一
一九一九	六四六、九九七、六八一	六三〇、八〇九、四一一	一六、一八八、二六九

五 四 風 潮

一橋論叢 第二十八卷 第六號

大戦中、中國土着工業で最も發展したのは紡織業と麵粉業で、當時の新創業に係るもの（一九一九年迄）を挙げると、

(名稱)	(地點)	(創立年)	(資本)
申新紡織第一廠、第二廠	上海	一九一六	三、〇〇〇、〇〇〇元
第五廠	"	"	一、〇〇〇、〇〇〇元
鴻裕紡織第一廠、第二廠	"	"	三、〇〇〇、〇〇〇兩
溥益紡織廠司	"	一九一八	一、〇〇〇、〇〇〇兩
厚生紡織第一廠、第二廠	"	"	二、〇〇〇、〇〇〇兩
久安紡織公司	南通	"	八〇〇、〇〇〇元
勸業紗廠	無錫	一九一六	二〇〇、〇〇〇元
廣勤紡織公司	"	一九一七	一、〇〇〇、〇〇〇元
魯豐公司第一廠	山東臨清	一九一五	三、〇〇〇、〇〇〇元
第二廠	濟南	"	二、二〇〇、〇〇〇元
湖南第一紗廠	長沙	一九一六	六〇〇、〇〇〇元
大生第二廠	海門	一九一七	二、四〇〇、〇〇〇兩
寶成第一廠	上海	一九一九	(不詳)
德大紗廠	"	一九一八	(不詳)

麵粉工業

(名稱)	(地點)	(創立年)	(資本)
豫豐紗廠	鄭州	一九一九	二、〇〇〇、〇〇〇元
裕紗廠紡織公司	天津	一九一八	七、二〇〇、〇〇〇元
新集紡廠	北京	一九一八	一五〇、〇〇〇元
漢口第一紗廠	漢口	一九一九	四、二〇〇、〇〇〇元
華新紡織公司津廠	天津	一九一八	二、七〇〇、〇〇〇元
成興紗廠	河南武步縣	一九一九	二〇〇、〇〇〇元
裕中第一紗廠	燕湖	"	一、〇〇〇、〇〇〇元
久興紡織公司	九江	"	一、〇〇〇、〇〇〇元
裕昌源火磨	長春	一九一四	三〇〇、〇〇〇元
福星麵粉第二廠	上海	"	一、二〇〇、〇〇〇元
永封麵粉公司	開封	"	四〇〇、〇〇〇元
華豐麵粉公司	上海	"	五〇〇、〇〇〇元
九豐麵粉公司	無錫	一九一五	五〇〇、〇〇〇兩
泰隆麵粉公司	"	一九一四	二〇〇、〇〇〇元
勝泰麵粉公司	蕪水	"	二〇〇、〇〇〇元
天民麵粉公司	北京	一九一八	二〇〇、〇〇〇元
民豐麵粉公司	天津	一九一八	一、〇〇〇、〇〇〇元

五四風潮

一橋論叢 第二十八卷 第六號

壽星麵粉公司	天津	一九一六	七〇〇、〇〇〇ループル
福星麵粉公司	"	一九一八	五〇〇、〇〇〇ループル
義昌泰	哈爾濱	"	三〇〇、〇〇〇ループル
廣信火磨	"	"	一五〇、〇〇〇ループル
廣大火磨	"	"	三〇〇、〇〇〇元
厚康火磨	"	"	二〇〇、〇〇〇元
東興火磨	傅家甸	一九一八	五〇〇、〇〇〇ループル
安裕火磨	"	"	三〇〇、〇〇〇ループル
廣裕火磨	"	"	一五〇、〇〇〇ループル
亞洲興業公司	長春	"	三〇〇、〇〇〇元
恆茂火磨	吉林	一九一六	三〇〇、〇〇〇元
湖南麵粉公司	長沙	"	二〇〇、〇〇〇元
福新麵粉公司	漢口	一九一八	五〇〇、〇〇〇元
貽成麵粉公司	鎮江	一九一五	二〇〇、〇〇〇元
泰來麵粉公司	泰洲	一九一六	二〇〇、〇〇〇元
大豐益麵粉公司	淮陰	一九一九	一〇〇、〇〇〇兩
九豐麵粉公司第一廠	無錫	"	二〇〇、〇〇〇元
元豐麵粉公司	上海	一九一八	三〇〇、〇〇〇元
長豐益記麵粉公司	"	一九一五	一〇〇、〇〇〇兩

資本不明
(中日合辦)

この期間中に新設された銀行は

(行名)	(資本)	(創立年)
信大麵粉公司	上海	五〇〇,〇〇〇元
申大麵粉公司	"	二五〇,〇〇〇元
中國麵粉公司	"	五〇〇,〇〇〇元
中華第一麵粉廠	"	一九一八
中華麵粉廠	"	一九一八
福新麵粉第六廠	"	一九一八
" 第二廠	"	一九一八
茂蘭福新麵粉公司	福州	一九一六
山東濟麵粉公司	濟南	一九一七
茂新第四麵粉廠	"	一九一七
豐年麵粉公司	"	一九一八
惠豐麵粉公司	"	一九一八
浙江地方實業銀行	二,〇〇〇,〇〇〇元	一九一五
上海商業儲蓄銀行	二,五〇〇,〇〇〇元	"
鹽業銀行	五,〇〇〇,〇〇〇元	"
中孚銀行	二,〇〇〇,〇〇〇元	一九一六
金城銀行	五,〇〇〇,〇〇〇元	一九一七

五四風潮

一橋論叢 第二十八卷 第六號

新華儲蓄銀行	一、二五〇、〇〇〇元	一九二四
大陸銀行	五、〇〇〇、〇〇〇元	一九一七
東亞銀行	一〇、〇〇〇、〇〇〇元	一九一四
中國實業銀行	二〇、〇〇〇、〇〇〇元	一九一九
東陸銀行	二、〇〇〇、〇〇〇元	

(資本金百萬元以下及省立銀行は之を含まず)

此外統計數字は一寸手許にないが、絲廠即ち絹絲工場の創設されたものも相當數に上つたし、尙一般に戰時中の好景氣に刺戟せられて、例へば人丹(仁丹の模造品)とか齒磨粉さてはキャラメルの様な類に至るまでの製造工場が國內の此處彼處に雨後の筍の如く建設せられたものであつた。

ところがひとり此時機に於ける日本の對中國經濟勢力の伸張はずい分目醒ましいものがあり、戰時中の中國の對外貿易尻は、以前よりは改善されたが依然入超であり、而して其入超の原因は日本の對華貿易、在華經濟施設の發展のためであつたと云つてよい。殊に前掲の表によつても看取できるように、此期間の中國紡織業の發達は相當觀るべきものがあつたが、併し日本の在華紡織業の發展は遙かに中國自體のそれを上廻り、從來から中國内に工場を持つていたものゝ外に新設せられたものが、大體

(名稱)	(地點)	(創立年)	(錠數)
上海紡紗公司第一廠	上海	一九一六	五〇、五五二
日華紡紗第三廠	浦東	一九一八	五二、二五六

日華紡紗第二廠	上海	一九一八	五五、五五二
内外棉第五東廠	"	一九一五	六六、二四〇
" 第五廠	"	"	"
" 第七廠	"	一九一九	二〇、七六八
" 第八廠	"	一九一五	"
" 第十二廠	"	一九一九	二〇、八〇〇
" 第六廠	青島	一九一七	"
富士紗廠	青島	一九一八	三一、三六〇

と言つた具合であつた。

而して以上各種製造工廠の製品は、中國側のものは、まだ何と言つても日本製品に較べると粗悪であり、而も經營、技術その他の點から、どうしても割高につくところから、自然何れも日本品に壓迫せられて十分に伸びることが出來ない。従つて當時の中國新興土着資本家にとつては、日本品はまつたく目の上の瘤であり、當面の障物であつた。とすれば、「^{ポイコット}抵制日貨」の風潮は、彼等にとつて正に其思う壺でなくてはならぬ。當時連りに「不買劣貨」とか「抵制劣貨」など、「劣貨」なる文句が日本品に對して盛んに使はれたのは、洵に問うにおちずして語るにおち、彼等の這般の實情を物語つていたものと謂えよう。

それに當時中國の學者等は異口同音に、抑々産業の發達には、もと社會の安定と軽い税率というものが必須條件である。然るに中國の現状は軍閥諸方に割據して地盤を争ひ、苛斂誅求をことゝしている。中國産業の發達は、得て望

むべくもないと慨嘆していたが、これは又以て直ちに産業資本家の意見でもあつたであらう。又一般に日本の授段政策は結局内戦の助長を結果するものとして危懼されていたから、學生團が軍閥の尤にして武斷政策を標榜する段政權に盾つき、之を窮地に陥れる排日排貨の運動を敢行することは、土着産業資本家の立場と、二重三重の意味に於て相通ずる者があつた譯である。

さればこそ、排日學生の國貨販賣運動がはじまると、さつそく兩者の間に聯繫がついて、相當多額の運動費が、此等製造業者からも學生團の手に渡されていたことも、かくれの無い事實である。^(註4)

最後に一九一七年(民六)のロシア革命から受けた刺激である。革命以來、ロシアは中國などとはちがつて、社會の各方面にその革命工作を實行に移し、着々効果を擧げているらしいことが傳えられて來る。此は革命の時機に於てはロシアより幾年か先んじながら、爾來一向に其實あがらず、依然として軍閥横行、社會的紊亂、國際的には被壓迫の地位に悩みつゞける中國人にとつては、反帝國主義、反封建軍閥等々のスローガンは、切實に彼等の胸を打つものがあり、標語としての効果は大きかつたであらう。憧憬と焦燥、それがこの機會をこそ國運挽回への一轉機たらしめなければならぬと、意氣ごんだ媾和會議の檜舞臺に於て、却つて自國の實力が暴露され、世界各國環視裡に鼎の輕重を問はれてしまつた失望と一緒になつたところに、あの五四風潮暴發へと激成されていつたと云う推移を思えば、ロシア革命の成功は、確かに大きな刺激となつたことを否定し難い。

併しまたそれだからとして、此運動が「勃發から」、「南方でも北方でも」、すべて「ロシアの十月革命、世界革命の號令の下に」、そして「李大釗及びその他の共產主義者たちの中核的領導下に」行はれたという風に看做せようとする

傾向のある、近頃の中國理論家の見解⁵⁾には、民八の五四勃發當初に關する限り、私はにわかに之に同することは出来ない。それは論者の現在の政治的立場に引ずられての偏面的見解たるきらいは無いであらうか。勿論一外國人としての觀察で、認識の不行届きということも考えなければならぬが、併し此は筆者の長い中國生活の中でも、特に會其發現の中心になつた北京大學にその頃いた關係、及び特にその調査のため各地を行脚した關係で當時の事情の裏も表も若干之に親炙して知ることが出來たし、又當時の知識分子、學生層の共產主義への理解がどの程度のものであつたかも略々見當もつくし、且又假りに所謂馬列思想と共產份子が、謂うが如く最初から「中核的領導性」を持つていたとすれば、五四に續く、若しくは其と關聯して急展開した五四新文化運動は、もつと異つた道を辿つたであらう筈である等々の理由から、斯くは云うのである。馬列主義が五四勃發以前にも、いつどのような經路から、どんな人達によつて、どの程度移入され消化^{消化}されていたかも知らぬ譯ではない。只併し、それだからとて、「打倒帝國主義」とか、「掃除萬惡的軍閥」とかの、其後中國の馬列主義者が好んで用いたと同じ口號が、當時既に用いられたからだるうとは思ふが、直ちに共產主義者が、五四の「開始より」中核的領導力を持ち、領導の骨幹をなした^(註)といふのは、一寸無理があらう。帝國主義と軍閥の打倒こそ新中國建設の第一要着であるとの考えは、何も共產主義者、馬列主義的知識分子に限つたものではない。當時の中國知識層の誰もが唱道したところである。云うが如く、共產主義者が、中國解放運動の中核的領導力をもち、領導の骨幹をなしたと謂えるのは、もう少し後のこと——それは其後非常に急激に進んだが——である。此邊の事情は、さきに述べたように、五四新文化運動を全般にわたつて、巨細に檢討することによつても、より明かにされ得ると思ふ。併し許された紙幅の關係上、それは更に他の機會にまつほかは無い。

一橋論叢 第二十八卷 第六號

註1 第一次歐洲大戰に中國の演じた役割功績から言えば、而して又この巴里會議が其後のワシントン會議其他に於ての中國の主張の伏線となつたと云う意味で當時の中國外交は決して失敗ではなかつた。

註2 民國一〇年の中國年鑑によると、中・小學校合計六、八七一校、生徒兒童數合計一八九、六四九人。教會設立のものに尙此外に幼稚園のあることを附記して置く。中國側國立校數二三、之に省立等の公立を併せて七二校であつたから、外人所辨のものが三分の一以上を占めた譯である。而も經費、設備、經營の點に於て中國側のものに遙かに劣つた。従つて社會的評價もそれに相應して中國側のものは低かつた。

註3 此に就いては日本人評論家が當時の日本の對支貿易が全外國貿易の中に於て占める地位を統計的に掲げ、中國人の此種考え方を是正しようとしたことがあるが、殆んど顧みられず、依然此種の説は恐らく今に到るも中國人の好んで信憑するところとなつてゐる。

註4 最近我邦で、此運動が學生の獨力で、誰からの援助も、何の背景も無しに行はれたようなことを書く向きもあるが、なる程近頃舶載の中國文獻などには随分そういう風に書いてあるから、無理もない。併し本文記載のことは、五四當時の中國人や中國在留邦人で此方面に留意した程の者には殆んど周知のことで、實は此運動の進展につれて、後にはまだ種々の裏、その又裏の複雑な事情も出て來るのである。只そこ迄言及しないのは、これで大體の動きはつくせるし、又當時其運動の相當な部署で活躍し、後日其情報を提供してくれた、尙現存の中國人達への影響を顧慮するからである。

註5 王念昆：學生運動史講話一七頁「……由於這個偉大的運動，由開始到發展都是李大劍同志及其他具有共產主義思想的革命份子的領導下進行的，並且在蘇聯十月革命的影響下孕育起來的（也有人說「五四」運動是胡適之流領導的，那是完全上了資產階級反動宣傳的當。……當年從北到南，領導運動的主要的都是共產主義者）。

華崗：五四運動史一五五—六頁「有些人……，還認爲五四運動或至少是五四新文化運動是資產階級知識份子胡適等領導的。有人表示惋惜，認爲像胡適這樣一位曾經領導過五四新文化運動的領袖人物，後來竟墜落到變成美蔣侵略中國和屠殺人民的幫兇，

實是在自己毀滅自己的光榮歷史。同時也有人機械地去了解歷史，認為在五四運動開始時期，無產階級還沒有成爲獨立的政治力量，馬克思主義還只開始介紹進來，中國共產黨也還沒有成立，因此，馬克思主義知識分子還沒有足夠領導這樣大規模的五四新文化運動。

很明顯的，上述兩種看法都和客觀歷史事實不相符合，因爲五四運動是中國人民羣衆反帝反封建運動的總爆發，「是在當時世界革命號令之下，是在俄國革命號令之下，是在列寧號令之下發生的」。這裏所說的俄國革命，就是一九一七年的十月革命，這是無產階級社會主義性質的革命。從此資產階級的世界革命正式結束，開闢了無產階級的世界革命的新時期。五四運動既然是十月革命和列寧號令之下所發生，自然也就擺脫資產階級世界革命的舊範疇，加入無產階級世界革命的新範疇。

註6 同上。